

〔注 釈〕

楊炯『王公安集原序』註釈

高 橋 庸 一 郎

はじめに

機会があつて先頃から王勃についての研究会に参加することになった。特にそこでは正倉院本『王勃詩序』の幾篇かを読解したのであるが、その文は巧みに自然の情景を読み込み、歴史上の逸話に基く典故を鏤め、友、酒、詩に浸りながらも、全体の雰囲気は極めて高踏的で隱者的、道家的であり、それでいて足は常に高官界にふまえておきたいという願望を持ち、嵇康、元籍に憧れ、更に加えて自分の才能には絶対的な自信を持つという、特異なその世界を完全に理解するには難解なものであった。こうした王勃その人を理解し、そしてその詩、詩序を理解する為に、王勃に係わる文献の注釈訳解を少しずつながらも試みていきたいと思う。

先づ最初にここにとりあげたものは、蔣清翊注の『王公安集』にとられた、唐華陰、楊炯の撰になる『王公安集原序』である。

大矣哉文之時義也。有天文焉、察時以觀其變、有人文焉、立言以重其範。歷年滋久、遞爲文質、應運以發其明、因人以通其粹。仲尼

既沒、游夏光洙泗之風、屈平自沈、唐宋弘汨羅之跡。文儒於焉異術、辭賦所以殊源。逮秦氏燔書、斯文天喪、漢皇改運、此道不還。賈馬蔚興、已虧頌、曹王傑起、更失於風騷、俚俚大猷、未忝前載、泊乎潘陸奮發、孫許相因、繼之以顏謝、申之以江鮑。梁魏羣材、周隋眾制、或苟求蟲篆、未盡力於丘墳、或獨徇波瀾、不尋源於禮樂。會時沿革、循古抑揚、多守律以自全、罕非常而制物。其有飛馳倏忽、僞紛紛、鼓動包四海之名、變化成一家之體、蹈前賢之未識、探先聖之不言。經籍爲心、得王何於逸契、風雲入思、叶張左於神交、故能使六合殊材、並推心於意匠、八方好事、咸受氣於文樞。出軌躅而驤首、馳光芒而動俗、非君之博物、孰能致於此乎。

大いなるかな文の時義なるや、天文有りて、時を察し以て其の變を觀、人文有りて、言を立て以て其の範を重んず。年を歷ること滋く久しく、遞ひに文質を爲り、運に應じて以て其の明を發し、人に因りて以て其の粹に通ず。仲尼既に沒し、游夏は洙泗の風を光か
しめ、屈平自から沈みて、唐宋は汨羅の跡を弘む。文儒は焉に異術

となり、辭賦は以て殊源とさる。秦氏に逮びて書を燔き、斯文は天喪ひ、漢皇は運を改めて、此道還えらず。賈と馬は蔚として興りて、已に雅頌に虧き、曹と王は傑として起りて、更に風騷に失われ、僂俛たる大猷は、未だ前載を忝しめず、潘陸奮發するに洎びて、孫許相因り、之を繼ぐに顔謝を以てし、之を申ふるに江鮑を以てす。梁魏の羣才、周隋の衆制は、或いは苟めに蟲篆を求めて、未だ力を丘墳に盡さず、或いは獨り波瀾洵ひて、源を禮樂に尋ねず。時に會ひて沿革し、古に循ひて抑揚し、多くは律を守りて以て自から全うし、罕に常に非ずして物を制す。其の飛馳すること倏忽たり、倜儻たること紛綸たる有り、鼓動は四海の名を包み、變化は一家の體を成し、前賢の未だ識らざるを蹈み、先聖の言わざるを探る。經籍を心と爲して、王何を逸契に得て、風雲を思に入れて、張左の神交に於けるに叶う。故に能く六合をして材を殊ならしめては、並に心を意匠に推し、八方をして事を好ましめては、咸く氣を文樞に受く、軌躅を出でて首を驤し、光芒を馳らせて俗を動かし、君の博物に非らざれば、孰ぞ能く此に致すや

(1) 時義——時を得ている。時が丁度よい時になつてゐる。『易・豫』に、「豫之時義大矣哉」（豫の時義は大いなる哉）とあり、これをふまえている。

(2) 天文——地上からみてとれる、天上の日月星、風雲雨雪などの変化現象。人文——地上で人間が織りなすさまざまな人事の変化。

『易・賁』に、「觀乎天文以察時變、觀乎人文以化成天下」（天文を

觀て以て時變を察し、人文を觀て以て化して天下を成す）とあり、本文は、この『易』の文をふまえている。またこの經文についての孔穎達の疏には、「言聖人觀察人文、則詩書禮樂之謂、當法比教而化成天下也」（聖人人文を觀察するを言う、則ち詩書禮樂これを謂う、當に此の数に法とつて天下を化成するなり）とある。

立言——『左伝・襄公二十四年』に、「天上有立德、其次有立功、其次立言、雖久不廢、此之謂不朽」（天上に立德有り、其次に立功有り、其次に立言有り、久しきと雖も廢されず、此れ之を不朽と謂う）とある。

(3) 文質——文体の華麗さと内容の実質性。杜預の『春秋経傳集解序』に、「史有文質、辭有詳略」（史に文質有り、辭に詳略有り）とあり、その孔穎達の疏に、「史文則辭華、史質則辭直、華則多詳、直則多略」（史文は則ち辭華なり、史質は則ち辭直なり、華は則ち詳を多くし、直は則ち略多くす）とある。

(4) 仲尼既没——『漢書藝文志』に、「仲尼没而微言絶」（仲尼没して微言絶ゆ）とある。

(5) 游夏——孔子の弟子の子游と子夏のこと。『論語・先進』に、「文學子游子夏」（文學は子游と子夏）とある。子游は字、姓は言、名は偃という。呉の人、魯に仕へて武城宰となる。子夏は卜商の字、衛の人、文學に長じ、孔門の詩学は子夏より孫卿などを経て、浮丘伯に伝わり魯詩の祖となつたという。また毛享に授けて毛詩の祖になつたともいう。また春秋公羊、穀梁二傳は子夏より傳わつたといわれる。

- (6) 洙泗の風——『説文』に、「洙水出泰山、蓋臨樂山北入泗、泗受洙水東入淮」(洙水は泰山より出で、蓋し樂山に臨みて北して泗に入り、泗は洙水を受けて東して淮に入る)とある。『禮記・檀弓』には、「吾與女事夫子於洙泗之間」(吾れ女と夫子に洙泗の間に事へむ)とあり、孔子が自己の学を大成し弟子達に教育した所が洙水と泗水にはさまれた地域であったという。洙泗の風とは孔子を中心とした儒者集団がもっていた学風。梁武帝の『答劉之遴詔』に、「丘明傳洙泗之風、公羊稟西河之學」(丘明は洙泗の風を傳え、公羊は西河の學を稟く)とあり、また任昉の『竟陵王行狀』には、「弘洙泗之風、闡迦維之化」(洙泗の風を弘め、迦維の化を闡く)と、洙泗の風の語が使われている。また日本の現存最古の漢詩集、『懷風藻』の序にも、「遂使俗漸洙泗之風、人趨齊魯之學」(遂に俗をして洙泗の風に漸ましめ、人をして齊魯の學に趨むかしむ)と見える。
- (7) 屈原——屈原。『史記・屈原傳』に、「名平、楚之同姓也、爲楚懷王左徒、憂愁幽思而作離騷、頃襄王立、令尹子蘭、卒使上官大夫短屈原於頃襄王、王怒而遷之、屈原懷石、自投汨羅以死」(名は平、楚の同姓なり。楚の懷王の左徒と爲り、憂愁幽思して離騷を作る。頃襄王立つ、令尹子蘭、卒に上官大夫をして屈原を頃襄王に短ぜしむ、王怒りて之を遷す。屈原石を懷いて、自から汨羅に投じて以て死す)とある。
- (8) 唐宋——唐勒と宋玉のこと、『史記・屈原傳』に、「屈原既死之後、楚有宋玉、唐勒、景差の徒者、皆好辭而以賦見稱、然皆祖屈原之從容辭命、終莫敢直諫」(屈原既に死せるの後、楚に宋玉・唐勒・

景差の徒なる者有り。皆辭を好みて賦を以て稱さる。然して皆屈原の從容たる辭命を祖とするも、終に敢えて直諫すること莫し)とある。また『漢書藝文志』には、「屈原賦二十五篇、唐勒賦四篇、宋玉賦十六篇」とある。

(9) 文儒——選述を専らとする儒者、『論衡・書解』に、「著作者爲文儒、説經者爲世儒」(著作する者は文儒爲り、説經する者は世儒爲り)とある。また明の李贄の引く『賈誼』に、「班氏文儒耳、只宜依司馬氏例以成一代之史、不宜自立論也」(班氏は文儒のみ、只だ宜しく司馬氏の例に依りて以て一代の史を成すのみ、自から論を立てるに宜しからざるなり)とあって、文儒の語はあまりいい意味には使われていないように見うけられる。その爲に、この文中では文儒は異術とむすびつけられているのであろう。

(10) 殊源——源を異にする。陳徐陵『東陽雙林寺傅大士碑』に、「機有殊源、應無恒質、自叙因緣、大宗如此」(機に殊源なるもの有り、應に恒質なるもの無かるべし、自から因緣を叙せば、大宗此の如し)とある。

(11) 逮秦氏燔燒——『史記・秦始皇本紀』に、「丞相李斯曰、臣請史官非秦記皆燒之、非博士官所職、天下敢有藏詩、書、百家語者、悉詣守、尉雜燒之、制曰可」(丞相李斯曰く、臣請ふ、史官の秦記に非ざるは皆之を燒き、博士官の職する所に非らずして、天下に敢えて藏する詩、書、百家の語有らば、悉く守尉に詣らしめ、雜りて之を燒かむと、制曰く可なりと)とある。

(12) 斯文天喪——『論語・爲政』に、「殷因於夏禮、所損益可知也、

周因於殷禮、所損益可知也、其或繼周者、雖百世可知也」(殷は夏の礼に因る。損益する所を知るべきなり。周は殷の礼に因る。損益する所を知るべきなり。その或いは周を繼ぐ者は、百世と雖も知るべきなり)とあって、孔子は夏殷周の三代の文化を高く評価し、中でも周の文化をより自分の理想に近いものと見た。それが『論語・八佾』の、「子曰、周監於二代、郁郁乎文哉、吾從周」(子曰く、周は二代に監みて、郁郁乎として文なる哉。我は周に従はむ)にあらわれている。この一句に使われている文が、斯文である。ここは同じく『論語・子罕』の、「文王既没、文不在茲、天之將喪斯文也、後死者不得與於斯文也、天之未喪斯文也、匡人其如予何」(文王既に没し、文茲に在らず。天の將に斯の文を喪ぼさんとするや、後れて死する者は斯の文に與るを得ざるなり。天の未だ斯の文を喪ぼざるや、匡人其れ予と如何せむ)をふまえている。

(13) 漢皇改運——『漢書・高帝上』に、「元年冬十月、五星聚于東井」(元年冬十月、五星東井に聚る)とあり、應劭の注に、「東井、秦之分野。五星所在、其下當有聖人以義取天下」(東井は秦の分野なり。五星の在る所、其の下に當に聖人有りて義を以て天下を取るなり)とある。また班孟堅の『兩都賦・西都賦』に、「及至大漢受命而都之也、仰悟東井之精、俯協河圖之靈。奉春建策、留侯演成、天人合應、以發皇明。乃眷西顧、寔惟作京」(大漢命を受け、之に都するに至るに及ぶや、仰ぎて東井の精を悟り、俯して河圖の靈に協ふ。奉春に策を建て、留侯は演成し、天人合應して、以て皇明を發す。乃ち眷して西に顧みて、寔に惟れ京を作る)とあり、李善の注に「天

四

謂五星也、人謂婁敬也、皇謂高祖也、四子講德論曰、天人並應」(天は五星を謂うなり。人は婁敬を謂うなり、皇は高祖を謂うなり、四子講德論に曰く、天・人は並に應ずるなりと)とある。

(14) 賈馬——賈誼と司馬相如のこと、『漢書・賈誼傳』に、「雒陽人也、年十八屬文、稱於郡中」(雒陽の人なり、年十八にして文を屬り、郡中に稱せらる)とあり、また、司馬相如については、同じく「司馬相如傳」に、「字長卿、蜀郡成都人、少好讀書」(字は長卿、蜀郡成都の人、少くして好みて書を讀む)とある。同書『藝文志』には、「賈誼賦七篇、司馬相如賦二十九篇」とある。

(15) 蔚——『説文』に、「蔚、牡蒿也、从艸、尉聲」とある。もとはよもぎ系統の草の名であつたらしい。それが後に草木がうつそうと繁茂するのを形容する語となつた。班固『西都賦』に、「茂樹蔭蔚、芳草被堤」(茂げる樹は蔭蔚として、芳草は堤を被う)とあり、その李善注に『蒼頡篇』を引いて、「蔚、草木盛貌」(蔚は草木の盛んなる貌なり)とある。『毛詩・候人』に、「蒼兮蔚兮南山朝隴、婉兮變兮季女斯飢」(蒼たり蔚たり、南山の朝隴、婉たり變たり、季女斯に飢ゆ)とあり、その毛傳には、「蒼蔚雲興貌、南山也、隴升雲也」(蒼も蔚も雲の興る貌なり、南山なり、隴は升雲なり)とある。こは、賈誼や相如のような詩人達が世に出で、一世を風靡しはじめることを言う。

(16) 雅頌——『毛詩・關雎』の序に、「詩有六義焉、一曰風、二曰賦、三曰比、四曰興、五曰雅、六曰頌」とあり、雅頌とは六義のうちの最後の二つを取つたもので、とりもなおさず『詩経』のことを言っ

ている。

(17) 曹王——曹植と王粲のこと、植は魏曹操の次子で文帝曹丕の弟。

『魏志・陳思王植傳』に、「字子建、善屬文、景初中詔撰錄植、前後所著賦頌詩銘雜論、凡百餘篇、副藏内外」（字は子建、善く文を屬る。景初中に詔して植を撰録す。前後著する所の賦・頌・詩・銘・雜論は、凡そ百餘篇、内外に副藏さる）とある。また『魏志』は王粲について、「王粲字仲宣、山陽高平人、善屬文、舉筆便成、無所改定、著詩賦論義垂六十篇」（王粲、字は仲宣、山陽高平の人、善く文を屬り、筆を舉げれば便ち成り、改め定む所無し。著する詩・賦・論義、六十篇に垂とす）とある。

(18) 傑起——ぬきんでて起きる。『蜀志・楊戲傳』に、「順期挺生、傑起龍驤」（期に順りて挺生し、傑起せる龍驤）とある。

(19) 風騷——詩經の国風と楚辭の離騷を指す。『宋書・謝靈運傳論』に、「原其飄流所始、莫不同祖風騷」（原は其の飄流の始る所、祖の風騷に同じからざる莫し）とある。

(20) 僊僊——努力。勤勉。『新書・勸學』に、「然則舜僊僊而加志、我僊僊而弗省耳」（然らば則ち舜は僊僊として志を加え、我は僊僊として省さざるのみ）とある。また『晉書・元籍傳』に、「臣僊僊從事」（臣は僊僊として事に従う）とあり、『釈文』には、「臣本亦作僊、僊僊猶勉勉也」（僊は本また僊に作る。僊僊は猶お勉勉なり）とあるから、眼・僊・僊・勉はともに同じ意味である。

(21) 大猷——国を治める大道。『詩經・巧言』に、「奕奕寢廟、君子作之、秩秩大猷、聖人莫之」（奕奕たる寢廟、君子これを作り、秩

秩たる大猷、聖人これを莫む）とあり、その鄭玄の注には、「猷、道也、大道、治國之禮法」（猷は道なり、大道は国を治める禮法なり）とある。

(22) 洎——『説文』に、「洎、灌釜也、从水、自聲」とある。もとは鍋に水をそそぎ込むことである。『集韻』には、「洎、及也」とあり、張衡『東京賦』に、「惠風廣被、澤洎幽荒」（惠風廣く被り、澤は幽荒に洎ぶ）とあって、李善は薛綜の注を引いて、「洎及也」としている。

(23) 潘陸——潘岳と陸機、『晉書・潘岳傳』に、「字安仁、榮陽中牟人、才名冠世、辭藻絕麗光、善爲哀誄之文」（字は安仁、榮陽中牟の人、才名世に冠たり、辭藻は麗光に絶え、善く哀誄の文を爲る）とある。また同じく『陸機傳』には、「字士衡、吳郡人、文章冠世、太原末與弟雲入洛、雲字士龍、少與兄機齊名、號曰二陸」（字は士衡、吳郡の人、文章は世に冠たり、太原の末に弟の雲と洛に入る。雲字は士龍、少くして兄機と名を齊くし、號して二陸を曰う）とある。

(24) 孫許——孫綽と許詢『晉書・孫綽傳』に、「字興公、少以文才垂稱於時文士、綽爲其冠」（字は興公、少くして文才を以て垂る。時に文士に稱され、綽は其の冠たり）とある。また江淹『雜體詩』の李善の注に、「晉中興書曰、高陽許詢、字宏度、寓居會稽、有才藻善屬文、時人皆欽愛之」（晉の中興書して曰く、高陽の許詢、字は宏度、會稽に寓居す。才藻有りて善く文を屬る、時の人皆欽しみて之を愛す）とある。

(25) 顏謝——顏延年と謝靈運、『宋書顏延之傳』に、「字延年、琅邪

臨沂人、文章之美冠絶當時、與陳郡謝靈運俱以辭采齊名、自潘岳陸機之後、文士莫及江左、稱顏謝焉」(字は延年、琅邪臨沂の人、文章の美なること當時に冠絶す。陳郡の謝靈運と俱に辭采を以て名を齊しくす、潘岳、陸機より後、文士江左に及ぶもの莫く、顏謝を稱さる)とある。また同じく『謝靈運傳』には、「陳郡陽夏人、文章之美、江左莫逮」(陳郡陽夏の人、文章の美なること、江左逮ぶ莫し)とある。

(26) 江鮑——江淹と鮑照、『梁書・江淹傳』に、「字文通、濟陽考城人、少以文章顯、凡所著述百餘篇、自撰爲前後集、行於世」(字は文通、濟陽考城の人、少くして文章を以て顯わる。凡そ著述する所百餘篇、自から撰して前後集を爲り、世に行わる)とある。また『宋書・宗室傳』に附して、「鮑照字明遠、交辭瞻逸」(鮑照、字は明遠、辭を交へれば逸なるを瞻る)とある。

(27) 梁魏羣材、周隋衆制——任昉の『王文憲集序』に、「雖楚趙羣才、漢魏衆作、會何足云」(楚趙の羣才、漢魏の衆作と雖ども、會て何ぞ云うに足らむや)などにも見える表現で、梁や魏に排出した多くのすぐれた文人達、また漢や魏につくられた多くの立派な制度という意味である。

(28) 蟲篆——彫蟲篆刻のこと。細いことにこだわること。『漢書・嚴彭祖傳』に、「何可委曲從俗苟求富貴乎」(何ぞ委曲俗に従いて苟しくも富貴平らかなるを求む可けんや)とあるのと同じく、この一句は細かいことにこだわっている間に一生を終えてしまうということを言っている。『法言・吾子』に、「或問、吾子少而好賦、曰然、

童子彫蟲篆刻、俄而曰壯夫不爲也」(或ひと問う、吾子少くして賦を好む、曰く然り、童子彫蟲篆刻す、俄かにして曰く、壯夫は爲さざるなり)とある。また『後漢書・楊賜傳』に、「造作賦說以蟲篆小枝見寵於時」(賦を作ると說を造すに蟲篆小枝を以つてし、時に寵せらる)とある。

(29) 非常——司馬相如の『難蜀父老』に、「蓋世父有非常之人、然後有非常之事、有非常之事然後有非常之功」(蓋し世に必ず非常の人有り、然る後非常の事有り、非常の事有りて然る後に非常の功有り)とある。

(30) 飛馳——いきおいの速いこと、仕官の道にはしること、曹丕『典論・論文』に、「是以古之作者、寄身於翰墨、見意於篇籍、不假良史之辭、不托飛馳之勢、而聲名自傳於後」(是を以て古の作者は、身を翰墨に寄せ、意を篇籍に見わし、良史の辭に假らず、飛馳の勢に托さず、而して聲名自から後に傳えらる)とある。

(31) 倏忽——はやいの意。班固『東都賦』に、「指顧倏忽」(指顧すれば倏忽なり)とあり、李善は注して、「倏忽疾也」とする。『龍龕手鑑』にも、「倏、倏忽、疾也」とする。

(32) 個儻——他ことなつてすぐれていること。司馬遷『報任安書』に、「唯個儻非常之人稱焉」(唯だ個儻非常の人のみ稱せらる)とある。

(33) 紛綸——多くて乱れているさま。『史記・司馬相如傳』に、「紛綸威蕤、堙滅而不稱者、不可勝數也」(紛綸たる威蕤も、堙滅して稱されざれば、數うるに勝る可からざるなり)とある。

(34) 王何——王弼と何晏、『魏志・鍾會傳』に、「山陽王弼好論儒道、辭才逸藏、注易及老子（注）弼字輔嗣」（山陽の王弼好んで儒道を論ず、辭才逸藏し、易に注して老子に及ぶ、〔注〕弼字は輔嗣）とある。また『何晏傳』に、「何進孫也、少以才秀知名、好老莊言作道德論及諸文賦、著述凡數十篇」（注）晏字平叔（何進の孫なり、少くして才秀なるを以て名を知らる。老莊の言を好みて、道德論及び諸の文賦を作る。著述凡そ數十篇〔注〕晏字は平叔）とある。

(35) 逸契——世俗を超越した神なるものとの交情、王勃『宇文德陽宅秋夜山亭宴序』に、「縦冲衿於俗表、留逸契於人間」（冲衿を俗表し縦にし、逸契を人間に留む）とある。また『本朝文粹』、紀長谷雄『後漢書竟宴各、詠史得龐公詩序』に、「經籍爲心、得王何於逸契」とあるのは、この楊炯の『王公安集原序』から取ったのであろう。

(36) 張左——張載と左太冲、『晉書・張載傳』に、「字孟陽、安平人、博學有文章、協字景陽少有雋才、與載齊名、亢字季陽、才藻不逮二昆、亦有屬綴、時人謂載協亢曰三張」（字は孟陽、安平の人、博學にして文章有り、協は字は景陽、少くして雋才有り、載と名を齊しくす。亢は字は季陽、才藻二昆に逮ばず。亦た屬綴有り、時の人、載・協・亢を三張と曰うと謂う）とある。

(37) 神交——『文選』、班固『答賓戲』に、「齊寧激聲於康衢、漢良受書於邳垠、皆族命而神交。匪詞言之所信」（齊寧は聲を康衢に激し、漢良は書を邳垠に受く、皆命を族^たてて神交して、詞言の信する所に匪ず）とあり、五臣注に、「良曰、言上四人、皆待天命。是神靈之交、匪詞言游說之所相信也」（良曰く、上四人は皆天命を待つ。是れ神

靈の交りにして、詞言游說の相い信する所に匪ざるを言うなり）とある。

(38) 意匠——文、詩、画などをつくるに当つての構想、『文選』陸機、『文賦』に、「辭程才以效伎、意司契而爲匠」（辭は才を程^{あは}して以て伎を效し、意は契を司りて匠を爲す）とある。

(39) 軌躅——車輪の通過した跡、『文選』、左思『蜀都賦』に、「外則軌躅八達、里閭對出」（外は則ち軌躅八達し、里閭對す）とある。
(40) 驥——馬が首を挙げて跳びはねること、『文選』、張衡『西京賦』に、「洪鐘萬鈞、猛虞越趙、負筈業而餘怒、乃奮翅而騰驥」（洪鐘萬鈞、猛虞越趙、筈業を負ひて餘怒し、乃ち翅を奮いて騰驥す）とあり、薛綜を引いた李善の注に、「驥、馳也」とある。

書かれる文章が時になつていくということは大変偉大なことである。それは、天文をよく見て時代の流れを感じとり、その変化を察知し、また人の世のあり様をよくみて、言葉を発して、世間に模範たりえているからである。また年月が長く経ても文章の美しさと内容とは相まって、その人の運命に應じてその賢明さがあらわれ、人それぞれに与えられている本質を熟知しているからである。

孔子は既にこの世にはおらず、その弟子の子游と子夏は、孔子の学のあとをついで立派にそれを人々の間にひろめたのである。また屈原は汨羅の淵に身を投じたが、唐勒や宋玉は、屈原の思いとその芸術性を世にひろめたのであった。しかし儒家の思想はやがて異端のものとされ、楚辭や賦は中華の文化とは来源を異にするものとさ

れたのであった。

秦始皇帝の時代になると、儒学を中心としたすぐれた書物がやかれ、周代を最高としてその後も連綿としてうけつがれ維持されて来た華夏の文化は、ここに亡び去ったのであるが、しかし漢代に入ると、高祖は天運を改めて感じ取ってもう秦の布した道に帰ることはしなかった。

そうしているうちに賈誼と司馬相如は勢いよく勃興して、この時にはもう詩経は權威を失っていた。またそれから曹植と王粲がぬきんでて起り、そしてこの時には詩経の詩も屈原の離騷も色あせていたのである。しかし勤勉にその時までつちかわれてきた太道は、決して前の時代にひけを取らず、更に潘岳や陸機、孫綽や許詢、顔延年や謝靈運があとにつづき、江淹や鮑照も続々と登場して来たのであった。梁や魏の時代に活躍した文人達、周や隋の時代に整備されたさまざまな立派な制度も、あまりにも細いことにこだわってまだその才能や効力をすべて發揮しないうちに潰え去ったものもあれば、或いは波瀾万丈のうねりにほんろうされて、結局は人間の本質のあり方を礼や楽に求めなかったものもあった。

その時々で困難をのり越え、古い文化に鑑みてそれをかいくぐり、多くのものは自から自制して生を全うしたが、中には少いが常識か

らかけ離れた形をもつ事に挑戦する者もあった。

そして其の仕官の道を人よりぬきんで疾駆し、溢れんばかりの才能をもて余す程の者もいる。その文章にみなぎる鼓動は世界の涯までもおおいつくし、その変化に富んだ表現は歴史の上での一つの潮流を形成し、前賢のまだ識りもしなかったことを自分で体得し、先聖のまだ言っていないことを自分の力で探っていくのである。万卷の書を読んでそれを修得し、王弼や何晏などの歴史の上の大家達と友情を結び、時代を貫く心意気を自分の力として、張衡や左思のような歴史上の偉大な文章家達と、心と心の交りを十分に行う。故に天地世界に存在するすべての物を、それぞれの特性を生かしながら、心の中で再構成し、四方八方で起るすべての事に興味を持って、それ等をことごとく文章の構想の中心に取り込むのである。先輩達の通つて来た道にとらわれることなく、首をのばして疾駆し、文章という光を森羅万象に当てて、その俗なるものも光の中に巻き込んでかがやかせるのである。

こうした事は、王勃君、君のような博覧彊氣の人でなくて、一体誰れに出来るというのであろうか。

(一九九四年十月十四日受理)